



和装本

ホ 2
1212
2



門 本 2
號 1212
卷 2



活語指南 後卷

● 變格活

△ 第十五

こ 將然

むねぬいでむナド受ルハ將然言ナルヲ畧因ニ見エタルソノナカニ
知んぬむト受タル四首ヲアゲテ証ス。コハ何レノ活語ニモ同事ナカラ
五十音ノ才五(才)韻ノ文字ヲ用ラキニセルハ、タ、
此。ノ。ミ。ユ。エ。念。ヲ。入。テ。初。学。ヲ。サ。ト。サ。ン。ト。ス。ル。也。

古三 ○み月をたさともありあんかしくさるまきまき花のよき城さるなや

月十五 ○曉のまねのねねさきもさきさきみかこね夜ハこれぞかむく

月十四 ○とらんといひくはりに長月のまの乃月をまうち出つるう那

月一 ○らみこむ。ハ。ラ。ハ。雷。と。も。あ。り。を。ま。う。消。む。ハ。有。と。も。あ。り。み。ま。う。や
注 清

き 連用

古序 〇天つちれひらけ初まをくる時よりいさゝきにたり

古二 〇採々えよさゝるる等々をうけてあるもいさゝかきけをりし

源氏ナトニきし方仍末ナト云ヘルハ。きハ連用言故モトヨリサル

ベキ理リナレド。し。あうト受ルキハ。さヨリ云ルヨリモ。こヨリこ。

こ。し。トイヘルゾ古歌古文ニ多カル。八衢ニ即加行ノ処。又佐行ノ処

ニ。あ。トイハテ。其辨論アリ。ソレニツキテツラ。ノ。考レハ。畧圖ノ

来字爲字ノ二行

せ	こ
す	き

トツレテ。こヲモセ。ラモ一分連用

氏ニベク物スヘキニ。あ。し。ラ。將然受ル辭ノツラ。ヨク辨フベシ。

く 截断

古訓 〇東のこより系へまうで。く。そ。き。う。そ。

古干 〇こがせこがくへ。さ。よ。ひ。あ。り。さ。く。が。よ。の。物。の。あ。る。ひ。ん。あ。て。あ。る。し。も

くる 連躰

古二 〇うごひすの答より出るあはたつ。ば。ま。る。る。こ。を。な。れ。う。あ。ら。や。し。

〇あやとのむえがてらう。く。る。人。は。ち。り。あ。れ。後。を。こ。ひ。し。か。る。る。を

くれ 已然

古訓 〇あさたろあさるるまきことのみいて。くれ。を。こ。ま。へ。す。あ。ま。い。こ。そ。ト。カ。リ。テ。截断トナル

古十三 〇あつれどこひしき時をりし。の。あ。よ。り。月。の。お。て。こ。で。くれ。

こ 希求

古七 〇澄美のいづそのあまをさひむをさるるあまへ。よ。り。こ。ま。の。び。く。し。

〇依る浪のあまをくらう。こ。ま。云。あ。れ。が。雨。を。あ。る。て。か。い。り。こ。こ。が。せ。及。来。吾。背

△第十六

せ 將然

○^古スてのそやんこうらんさうしんをりてあつとせん

○^{日四}をみるへいおほる舟へよやとりせ。バ。わたくあぶれ名をやたちあん

佐行ニテ此変格ト云ベキハタラキ詞ハ。為るトおとびるトニッナ

ル「ハ衛^{上卷四}ニ三エタルが如シ。ソノ中ニテ為るト云ルニツキテ

今ハ五轉ノ例証ヲニッ出スナリ。たえするトイヘルニツキテソノ

五轉ノハタラキサマノ正キ。又聊異ヤウナルナドノコマカナル

ハ。山口栞^{上ノ四六ヨリ}ヲ見テ知ルヘシ。^{サテ志ノニノ辞ニウケラル、}

又ヘキニ。加行変格来ノ^{五三マデ}トコロニイヘルがゴトシ。^{井ハ。せ文字連用ノ段マデ及ヒ下リ}

志 連用

○^古仁和の中將のそやん心の家コ合せんそまける。時ノ後々云

為果る。まうへまナド。アグルニタヘズオホシ

志 截断

○^古ちりひらの胡弓をところさざびありまま。と。たゆひて

○^{上佐日記}うまのそをむけま。タ。門出ま。ナド。

志 連躰

○^古秋の野よりもまひぬ松虫はあま。る。く。小屋。と。やからま。

○^古又月まの花橋のうをくげむむ。の人のそがれ。をぞ。ま。る。

志 已然

古三 〇夏の夜のふれうとまら。バ時をかろく一了るイノつらろしめ

古四 〇こよひえん人よはあひしたるうこのちをわづらまぢもこそまら

せよ 希求

古七 〇あよひひまろや子代よそりそへてとめたまてハおひひてよせよ

古物名 〇夏川の心べよをれをまろ雲のいうよせよ

コノ用言ニツキテモ、八衢^上ニイヘル^下アリ、イハク、あ^上う^下云

せ^上う^下あ^上せ^下う^下のこ受る云、コレハカノ来ノこヨリモき

ヨリモ受ルトハ又異ニテ、あ^上う^下あ^上う^下トイヘル^下ハ一モナクイツ

モイツモせ^上う^下せ^上う^下トイフ例ニ、コノ格モ底廻影ナル^上ニテツマビ

ラカニ、サテ此佐行変格活詞ハ夥シケレド、原ハタバニツニ、其一ハ

為る^上今^下ハ林をす^上カクテ^下たを^上はる^下ト云言ハ、コトニヨクヤ

ズ、バタカフ^上多カル^下ベシ、山口栞上卷^四ナル辨ノクハシキヲミテ

曉ム^上ベシ、希求ハ^上せよ^下ト云ガ^上ツハ^下定格ナレド、稀々

ニハね^上せ^下ト、上^上文字^下ノ^上ズ^下タ^上ニ^下仰スル詞トセルモアルヨシ

ナドモ、山口栞ヲダニ見バ、精細ニシラレ又ヘシ。

第十七

コ、ナル活キノ詞ハ^性ぬる^死とぬる^生ノ^上ニツ^下ニ^上八衢^下ニイヘル^下ニ然ニ、コレ
ニヨリテ^上次^下五^上轉^下及^上希求^下ノ^上六ツ^下ノ^上活用^下ノ^上例^下、此^上二語^下ヲ^上各^下一ツ^上、出^下シ^上テ^下ミ^上ス
ベシ、但^上レ^下右^上ニ^下モ^上実^下ハ^上一^下ニ^上去^下ル^上ニ^下過^上言^下ノ^上タ^下、^上コ^下リ^上テ^下サ^上ズ^下ぬ^上ル^下、ツレカ^上ツ^下バ
^上テ^下リ^上テ^下ぬ^上ル^下トナレル^下、人ノ^上亡ス^下ラ^上ナ^下ク^上は^下ツ^上ダ^下兼^上ナ^下ド^上ニ^下多^上ク^下今^上世^下モ^上ハ^下ラ^上至^下ト

か 将然

古亭 〇君^上け^下さ^上ら^下し^上は^下此^上身^下の^上ね^下を^上い^下な^上む^下、^上意^下し^上ま^下を^上い^下な^上む^下、^上え^下や^上ら^下ん

古亭一 〇意^上志^下ある^上バ^下た^上ガ^下名^上え^下た^上ら^下し^上、^上世^下の中^上の^下名^上ある^下お^上い^下ひ^上ハ^下た^上ら^下ん

右等ハ 返一トイヒテモ 何ニシテモ同意ノ如聞ユルヲ てトナト並フ 云

之。又てめニタクヒテなめト云ハ。

○ 古 ちりぬれむらめどあきしあき物をりまこそさらくをくハ折りてあ

○ 古 妻あはよ花の葉ハ折りなめどつひんこしはいのちたりりり

又てぬトちぬトナラフハ

○ 後三 うくまぐちちよをやはつてぬをねのときをも有トえさへく

○ 日十一 乃ちらうやみやハあきぬ折ハ坂のせきのゆあハ海といゆ也

又てよニタクヒテハ 採ト云ハ

○ 邪古恋一 秘波くさみしうさすれあのみもあきではををさうてよやや

○ 日 玉の珠よたえあハさえぬをぐへハああるこのよこりもぞゆる

右 ちんむ ぬぬるぬれハ大氏自然言ヲ受。

てんむ てつづつれてよハ凡ノ使然言ヲ受。

細カニ論セハ
カクノ三モイ
ハル下ジケレ
ド大凡シカニ

● 下二段活

△ 第十八 ● 阿行

え 将然

○ 万十五 ちんむもまといりえんやさめる折のいめにも妹がこえさうたうに

え 連用

○ 古序 こんくきえうるところをぬあさひいある

○ 後松恋 かくくたよえやたいひさみさうもあさうもあさうをりあさひを

ツイテニ云ン。カラブニトモニテハ。得言ヲバ訓ジテハ。イフコトヲウ。

或ハ「言フコラエタリ」トヤウニイヒ、不得曰ラハ「イフコラエズ」トヤ
ウニヨムコナルヲ、御國詞ニテハえいふ、えいふ、トヤウニゾイフ
ナル、コレモコ、ロエオクベキツシ。

古事記傳ニ此弁アリ、但シ然ル上ニ又
細論アリ、題シラズト云書ニ三エタリ。

う 截断

イセ物語ニハ 女のえうまうかりけるを

此類オヒタシ

うる 連駢

万十五

あまうも独りうらうらふのよけれや海のむらに本離してあらん

拾遺歌

あまの名のまうの布とたささげさいさまを人をもるよしもをし

うれ 已然

順崇

いふふして花をまつまゝむのうをそらふつこほろつてもこそうれ

えよ 希求

△第十九

●加行

自下下二段活等ハ例夥クテアグルテモナケレド、
初学ノ為ニ首ツハナホ出シテントス。

け 將然

むらげあけ。バ君が名とちねべとあぶくろく。坂人足けんうも

け 連用

あめつちのひらけ。むらまうける時よりいであふらう

く 截断

ふた川流わらう。神を月あまのあをそぬきにして

くる 連躰

〇^{吉三}谷風こころ。秋のひまごころうち物るたみやまのまつたを

くれ 已然

〇^{吉五}秋のゆりみちをぬきこむ。くれ。はむあまへぞ様こちすは

けよ 希求

〇^{吉九}こころ系八十考うけあまこきぬとくうけつげ。よ。あまのつり舟

此下二段ノ用キノけせて採へめえれ急う。其下、ニテよ文字
ソヘズニ。タビニ希求トセル下古キガ一躰ト云フオモムキニハ
ま^上ニハ三エタリ。ゲニサヤウト思ハル。然レモ又思フニ。ソハ
ナホ下二段活ノ才四音ヲ下知ニセルニハアラデ。下二段活ト後

ニハナレル詞が古クハ四段ノ活キナル

ソノ明ナル例証ハ。恐リ隠リナド。山口
葉ナドニツバラニ見エタルガゴト。

故トモ云ベキカ。躬恒集埜うてむ入込のあもみりやまのうしろの
浪よよせよ。沖つ浪。カク字ア。リテハシラベムツカレゲナレド。オク
ベキよ。モジラオカヌ。トハサスガニアタハガリケンナドヨリモ考
フベキコゾ。

△第二十 佐行

せ 將然

〇^{後科十五}あま川の流のいもみまわし。くれ。こも。う。人。を。よ。せ。お。を。や

此よせ^{下二段活}ノラよ^{四段ノ活}さ^{下二段}トハイハレヌニテ准レテレルベシ。合^{下二段}せ^{下二段}
任^{下二段}せ^{下二段}。あ^{下二段}せ^{下二段}。ナド^{下二段}ラ。合^{下二段}さ^{下二段}。任^{下二段}さ^{下二段}。あ^{下二段}せ^{下二段}。ナド^{下二段}云ヒテハ語

ト、ノハヌツシ。初学ヨク心ヲツケテ畧図ヲミルベシ。

せ 連用

〇つる飛もちとせの後をきくなくかあつねころよまうせをてん

右ヲまうし。て。トハイハレヌズ。畧圖ニ心ヲトムベキ要コ

コヲノコへ。但まゐるハ下ニノ用キナルニヨテ。まて。は。ひ。ま。つ。る。は

フ用言へハ必セヨリウツレリ。必。し。し。ヨリウツスベカラズ。詞

ハトモスレハ人ノ誤ツコ。鈴屋集ナドニサへ之カ用ヒ
誤アリ。雅話ニ編ナル但や。むのノ条ヨク考フベシ。

ま 截断

〇吾君よりけハ恋らし強ひふる芽花さくへどいやなせよやま

あま 連駢

截断言

瘦

古四 〇河風のさぶしくもあそびにほる。涙もあそびやあきた。たつらん

コレヲ好よそ。涙トハイフテ。ジキニ例シテ。但そ人合ハ事ナド
三ナヒガ。フニテ。必。但まゐる人。合も。事ト様ニ云ベキ。程ヲ察スベシ。

ま 已然

古三三 〇おどよ人をあせせまもら。を。れ。たい。ま。け。れ。ど。え。あ。ま。ぞ

スベテこそノムスビヲセ。は語ト。こそノムスビヲま。れ。は語トノワ

ケヲシルベシ。 ま。あ。る。せ。い。ト。イ。ヘル。モ。ま。あ。る。あ。い。ト。イ。ハ。シ。モ。何。ノ。ワ。カ。ツ。ベ。キ。

コトワリアラント云へル。説ラズトテ。論ジツメラレシコト。ま
いでのいそニ
見エタルヲ三ヘシ。

せよ 希求

三ツ子集 〇塩みてむ入ぬのもうらやまのあしり。れ。漢。よ。せ。よ。沖。り。浪

コレヲ三ヨ。下二段ノ用キモハ必^ヨ文字ツヘテ希求トスルガ通
例ニよセ沖つ派ト云ハ七字ト、ヒ字余リニナラズヨキ様
ナレド、貸^カ足^ツ刺^サハナドノ如キ四段ノハタラキコトバトハチガ
ヒ、坎^カよ^カス^カカノ^カイ^カを^カ合^カを^カ瘦^ヤを^ヤ失^ウを^ウナドハ。せよトイハテハナ
ラヌワケトクト合点レ玉ヘ。

△第廿一 多行

て 將然

古三 〇大^古くは月をもちて。そぞこのつりねバ人のもとなるもの

て 連用

古三 〇人^古もこねりのあまうまのなまきゆるえぶを打てけるうな

祢^ネてのねけのまのありともナドヤウニで。ツツカフハ。下二段ノ
連用言ヲ躰ニ云ヒナセルニテ。あひいで。せんノいでナド、モハ
ラ同じサレバ紐鏡ニハ才廿六段ノ^フて才二十段ノ^フてト
ワカテレド。今ハコレヲ^フニ^フジヘテ引証スル。

フ 截断

古三 〇^古あ^古く^古は^古あ^古ま^古を^古もち^古む^古く^古さ^古れ^古の^古ね^古を^古り^古の^古衣^古を^古よ^古い^古づ^古る^古ゆ^古あ
勿^カレ^カを^カシ^カテ^カ受^カル^カハ^カ必^カ截^カ断^カ言^カナル^カ例^カ。但^カレ^カ初^カニ^カ云^カル^カ如^カク^カコ^カノ^カ莫^カハ^カ右^カ様^カニ^カ用^カフ^カ諸^カ活^カ語^カへ
付^カキ^カハ^カセ^カザ^カル^カ之^カ略^カ図^カニ^カテ^カハ^カ加^カ行^カ変^カ格^カ来^カを^カヨリ
勿^カ去^カテ^カテ^カニ^カコ^カレ^カト^カ同^カ意^カ同^カ語^カ乍^カフ^カ勿^カ来^カそ^カ於^カ色^カ莫^カ出^カ矣^カト^カ様^カニ^カ用^カフ^カ氏^カハ^カ用^カ言^カト^カ用^カ言^カト^カ同^カニ
狭^カリ^カテ^カ其^カ片^カハ^カ連^カ用^カ言^カヲ^カト^カ受^カル^カニ^カサ^カル^カハ^カ躰^カ言^カヲ^カウ^カケ^カ連^カ用^カ言^カニ^カテ^カ治^カム^カル^カ雲^カ莫^カ抽^カ引^カ入^カ勿^カ答^カス
ナド^カ氏^カ同^カニ^カ様^カニ^カテ^カ然^カ用^カフ^カを^カハ^カ畧^カ図^カノ^カ過^カ去^カけ^カ不^カノ^カヲ^カ將^カノ^カん^カハ^カ除^カテ^カ自^カ余^カノ^カ諸^カ活^カハ^カ皆^カ渡^カへ
又^カ此^カ截^カ断^カ言^カ受^カル^カ莫^カハ^カ上^カニ^カイ^カヘル^カ如^カク^カソ^カレ^カヨリ^カ狭^カク^カ形^カ状^カ言^カナド^カハ^カ皆^カ及^カハ^カサ^カル^カ。

つる 連躰

古二 ○言風うとらる砂のむかごととらうちいつる浪やとらるの初たる

つれ 已然

「こそヲ結テつれトイヘルハ已然言ナル例」

六帖二 ○まゝれたむえんとあふこころこそその名のなるとオよたちいつれ

此ハテノ句後撰ニハともに入れトアレド六帖ニテハ立出是ナリ

受辞ノ方ニテ証セバ世中ハうさむにそへる影をれやれりひを

つれどたまれざりなり ナド類多シ

てよ 希求

五十 ○こりのこ恋れたささし花のさささいでよあさなまえん

隠耳

用出与朝且将見

カノつつろナドイヘル辞モコノ用キ詞ノ一ナレバ久々の天

の河系の後しち君ささりなバかぢうくしてよナドモ上ノ

嘆いでよト全ク同例ニ

△第廿二 奈行

ひもくしニ寐るヲオサセ一段ニレ尋るナトラオサセ
段ニ拳タルヨリニレバ別ナルサテニ似タレド寐るモ
尋る 付る 撰る 兼る ナド、異ナルヲサラニナレサルカ
ラニ一首づト例ス中ナレドコノ行ニテハアルハニシ
ナラベ出スベシソノ一ニ寐寢ノ字ニアタル語一ハ自余
ノ諸ニ當ル言

将然

古一 於イ恋一 ○は川のふしうれ尾のまじうをみながくしををいとうもねん

古八 ○玉のうゆくうのあふふまねどもゆきのまじくおとハふねん

連用

古十六 ○ねてもあねでもあえたり大さハうつせこのよまま後この有ある

古十八 ○さうのうちのことくねわち云

ぬ

截断

古十一 一きもあき人をやねくかあのかくといまげさぬハあまのづん

全乗春

〇あまのづんまうまうまをたつぬとそくらぬあまのなうつるをか

ぬる

連射

古三 〇ちうをだよをあんとぞあま嘆しよあ妹とこがぬる。床友のまね

古十五

〇二條のいいうまちん年あまたづぬる人もあまどく思へバ

ぬれ

已然

古十二

〇思ひほぬれむや人のええつらん後とありせはさきさきしを

後抄雜一

〇ふるやのこ痛のいさをあぬれどもさきま月影のこもまし

ねよ

希末

万四

〇さる人をねよものつるれがあをいもへバいぬくをぬりも

於イ十

〇さるやこをのゆふそ中人たてつくりくさねよちよけあるくく

第廿三

波行

紐鏡ニ任るト侍るナド、ヲ別ノ如クセレド全日下ニ故ニ共行モ或ハニ証并べ出ス意バへ次上ニイヘルニ同ジ。

ハ

將然

古十一

〇さるに啼てひちよりかどもまきあしぬれうし油くこまらぶらへん

於春

〇ふらせまで取れるねもりやうハあまひひうれてよらつ代やへん

紐

ハ

連用

古五

〇さるの花うきたりくらふくかたへん。うりらるあ

古五

〇かくばうりへん。うりらるあ。うりらるあ。うりらるあ。うりらるあ。

ふ

截断

古十五 ○相つか ちわの山いこう侍さん経 ちよふぬる人もはらじとあへた

○堪 えんまふいふないたまふ云

ある 連躰

古七 ○茶 位のはの松を秋うぜふくうらよるあぢそ茶 沖のあよる

古九初 ○傳 よめるとまんかきうつめろ云

是ハかんトカ、リテあるト截断セルナレバ、タゞ切ルハ傳ふ
ト云ヘキ、自ラレルベシ、カノあごとのあるあまのよひあ

ナド、同例へ

已然

古八 ○教 ちよふぬるまふぬあはれど花きうればあひもあし

古八 ○経 さうあれたよまひをぬあはれど花きうればあひもあし

へよ 希求

古三 ○教 花ちよふぬのやうりて流うしちよふぬをよゆきとくもん

ツイデニ云ン、源氏若紫ニいさたまへよ給 をうし給給云、同藤裏

兼とを垂しむへよと云、コレラハ四段ノ活キノへ、ハタゞニ希求

ナレド、又下レ、ハニハカノよ、文字ソへタル又ノ例へ、思ヒテ、カフ

ル、勿レ、右教へよ、ト云ヘルコレト同シク、下二段ノ活キノへ

ニよ、モジソへタルハイトオホカル、ニテ、後撰三詞ニモ、この花

コえくらへよ、とりたれをナド、コレラハあへト云ヒくべ

ト云ヘル、ニニテハ不成語ト云ベキ、ツノ格ナルヲ、カノ給へ

ナドハむへ。はへルノミニテ其語ヨクトノヒよ。文字ソヘタル方ハ却リ
テ俗ニ近キニテ。へよノ同例ニテハナキゾ。

〇

△第廿四 麻行

め 將然

〇天つうせ雲のうよひぢ吹とぢよをまめれをぶご志をいさめん

め 連用

〇赤ころろあぐさあうみつさらーなやをぞ捨ふよてる月をみるて

む 截断

〇ホきくハうつてお殖じほくさげ来呼ごよめてこひまきさしむ

〇^今むト云語ノ用キハ麻行下二段ニテ求む止むナト、全同ナレド、
 坎一むニカギリテメレガ上ニタツ語ヲ受ルヤウ外ノ^{求む止む勤む}
 語ニ異リテ普通ノ連用言ヨリまさりしめトハナク將然言ヨ
 リまさりしむトヤウニ云例ニ^{だぬんまきまき}
 むる 連駢^{ナドニ類フニ考フベシ}

〇^古梅花うちよるむくりりしより人のとがむふきこぞーいなる

〇^接さびしき宿をまき出てあがむれごいつこも月一秋の夕ぐれ
 コハ一本をうむれむナルエ。どトウクルモをトウクルモトモニ
 むれハ已然言ナル証ニ。

めよ 希求

○お坂のせきさーまきさーまきおあうハ何うぞこころをとる。

△第廿五 也行

え 將然

「コハ截断ニエトトウケ

○まゝだまゝやとハエ。えど。新あしこくおもくけしつるがなれば

「コレ正クコノ証ニトウケタレバ

え 連用

○さえつる時しきればこちまゝまゝの名ハ雷にぞかけら

也 截断

○大さやのうちまきぞや。細川すとあごそのつるにきつてよびこま

ある 連射

○かまのくけい。え。雷と浪とをあげま

也 已然

○梅もまゝわらまをくくぶひやまこ。かれど。まきくぞか

えよ 希求

コ、ニコトワリ置へキアアリ。古今九ふトのねのららぬ思ひい
めえむめ。えトアルラミテ。初学或ハコノ才廿五ノ希求ハタマ
えトイヘル例ト思フアランカナレドコノめえむめハカノ
順集ニまやくまゝトアル如ク古キ処ノ別ニツノ格ニ
乞アレナヘテハえ。ニよモジ漆テゾ希求トハスル定ゾ思ヒタ

ヨフコ勿レ

△第廿六

・羅行

れ 將然

○^{古五}陸奥のちのふりぢぢり津也まよれんともふ赤なうまふ

れ 連用

○^{古二}もろ毎うなる川を花とんてをられぬまよ袖やぬまなん

此ちんハるトんトノ合ヘルニハ非ズ都テ連用言ヲ受ルちんニ又カク

くもろくもぢりまななん こころひこちんナドノちんニモ

アラズ。 ^{ちんニツアリテハ將然言ヲウケテハ連用言ヲ受ルコト畧図}

○^{古五}やとりせし人のくこみうふぢぢりはまきられぬ死毒に白ひりく

る 截断

○^{古五}くつ川ゆもぢぢぢぢぢぢぢ 津ちみのこむろれ山よあられちらし

る 連用

○^{古二}もろごしにるがるく川を花とんてをられぬ水よ袖やぬれちん

る 已然

○^{古五}吹くくよ秋のくさ木の志をまねむうへんう勢を荒といふらん

れ 希求

○^{古三}よそくアんでぬらん人よ着の花をひまろまねよえごこちぢぢぢ

△第廿七

・和行

る 將然

〇^古宿ちくくろめの花うきあぢきあく侍人のうまはやまをれり

〇^{万三}連用

〇^{万三}あきさとのめりけいと居るおれとも

又万五長哥ニまづあきひとのちくちくはうきあぢきむらん
貧人乃父母波飢寒良年

〇^{イセモノノ語廿一段}截断

〇^{イセモノノ語廿一段}あぢきあく。と。たよきくおちるバあひりりとはあうもあたまし

〇^{後并賀}連射

〇^{後并賀}あぢきあく。と。たよきくおちるバあひりりとはあうもあたまし

万十五同五人のうきあぢきあく。と。たよきくおちるバあひりりとはあうもあたまし

用ニッ明シ

〇^{るれ}已然

〇^{るよ}希求

願集ニあぢきあく。と。たよきくおちるバあひりりとはあうもあたまし
テ希求ニツカヘルハ都テ古キ一格ニハ例アルナラウヘニカノ哥ハあぢきあく始ト
終リニ置テト勤メタル哥ナレハサレバあぢきあくと云ガナホ希求ノ言ノ都テ
ノ定例ニアルガミニりえたりえト云ル哥ノサダメセシト台考

●中二段活

△第廿八 ●加行

〇^さ將然

〇^{万四}家人ノあぢきあく。と。たよきくおちるバあひりりとはあうもあたまし

〇^さ連用

古五 ○袂あひの山をまきまきゆく秋きればふる川よぞめきハたむる

截断

古十三 ○信のさへる君よりさへや夏のうよひぢ人のよくらん

連射

古十七 ○さうさまに年もやうあんもあつばさぐる齡やこもにうへる

已然

万九 ○家人の使あらしもさめの上れどもをぬるんあへた

希求

万十六 ○吾門より千よりあを鳴たさよたさよあ一夜美人よあうまれ

△第廿九 多行

将然

古六 ○常ありてさうのくれぬる時こそつひよぢぬまつもええくれ

連用

古序 ○つん哥のむこぢぢあへど又亦古秋この毎に秋そ悲きもあつて寺

截断

古十七 ○おひせくころの中の泣きれやたつとハみれど喜のさこえぬ

コレハ截断ラトトウケテ下へツバケリ又アサレクフトキレタ
ルヲ示サバ

清正集 ○さきそめの衣子そわづのたけひあつうまうハぬころるう那

連射

〇^{古五}秋の月山色さやうしてらせろハたつる。み葉乃うきをみよころ

つれ 已然

〇^{六帖}たりたてをオこそそおづれ。其の田のふもくこもいまはやめてん

ちよ 希求

〇^{古七}天つ風雲のかよひぢふささぢよ。よをよめのをささあぢうそめん

コノ中二段ノ多行ノ活キニ満満ナドハ用フベカラス。世人多ハ誤リ

ト云詞ハ四段ニ活クト下二段ニハタラクトニツアリ。細論山日

葉中卷ニ出タリ。

△第三十 波行

ひ 將然

〇^{古エ}山さみあさぢあぢあぢのあさよのまうれてこひん。喜ひかぬも

ひ 連用

〇^{古上}其日那のゆきすをふてねひい。くもあけつらうみえ。若も

ふ 截断

〇^日夕々れハ雲のけそそ小おそねりやあつたならん人をさか。とそ

ふる 連射

〇玉の珠よ。えあむたえねあらへばあのかさ。ひのよもりもそする

ふれ 已然

〇^{古上}志のゆい。ばくろ。さおを人あれ。あまふてふこや。たれよう。うん

ひよ 希求

ウチ花雨申子
〇さうらむあひひよや
漢籍訓ニ與其媚於奧寧媚於寵何謂セトヨメル
こひよ古言ニヨクカナヒテ強ひよニオナシ

△第卅一 麻行

み 將然

〇花ちられ風のやいりハ泣くしるこれよをうへよけてううん

み 連用

〇さく花ハラくさなぐうあふなれどたれうまきをううハてたる

む 截断

〇浪波くく恨むべきまもたれわえいづをまのいぬとてある

むる 連躰

〇光まつまろくろをわらるおハさえうつりつ世をぞ恨むる
後科恋

むれ 已然

〇つらうともるも人たあハたんあまれたこそをばうむれ
全葉恋下

みよ 希求

〇吹りせをたうさ恨みようぐひはあやハむもぞうあれたる

△第卅二 也行

い 將然

〇たいぬくそあどろ己が才をせめきらんたいぢハバふよはたまうのう
古七

い 連用

〇たいぬくそあどろ己が才をせめきけんおいぢハバふよ
老

又これをさうふ人をたもたぬ報いよやまろふ人のそれぬ

あるぬトアル。此むくいハ連用言ヲ躰ニ云ヒナセル。抑報。いハ
報ひトスルハハルカ後ノ。モトハ也行ノ活ナル。字鏡ニ牟久以
ト書ルニテシルシ。猶山口采ニクハシキ説アルヲ三ヨ。

○^{古七}ス。ハ月をもあぢ。これそのつめれを人のたいとあるの

○^百こい。まろび。意ハ。ぬともいちぢろくま。ハお。胡ガ。の。を

こい。まろび。ハ。コヤレ。ト。ロビ。ニ。テ。こ。ろ。び。ふ。又。義。ハ。展。ハ。老。悔。ナ。ド

同活ニテ展轉シテ卧スルヲこいふをトモ云。万五長哥ニモ

宇知比佐受宮弊能保留等云。等許自物宇知許伊布志提云

○^{万三}妹も吾も清之河のかえづーのいもくくゆべ。こ。ろ。ろ。え。め。こ。ー

〇

截断

活指後

〇

連躰

○^{元補集}秋ふりえま。と。ま。ん。を。や。る。兼。え。れ。バ。む。の。う。へ。も。た。も。あ。え。ぬ。ま

〇

已然

○^{加茂保喜集}ま。ま。毎。人。ハ。を。や。れ。ど。あ。ま。は。な。ま

〇

希求

○^{ウシホ茂実上廿九}ホ。ま。ま。く。く。涼。ま。う。げ。ま。え。人。乃。ま。ま。あ。ま。ま。ぞ。わ。い。よ。む。え。松

△第卅三

●羅行

〇

將然

○^{古恋二}このめつ。ら。ま。で。牟。あ。る。いつ。ま。り。に。こ。り。ぬ。こ。ろ。を。人。は。う。ら。ま。ん

○^{後并恋一}月。ハ。や。く。な。ら。れ。熟。し。た。り。ふ。を。意。し。ま。ま。の。ま。ま。も。あ。り。ぬ。

り 連用

○^古 ちごりごへづるまは抱こさるうたされもこれぞありあ

る 截断

○^古 花のまはうつりまを『いづるまをまよふ』ちがめせし

ツイデニイハン。コノ哥降ニ経るラカケタルニハ非ズ。亦オカ

レバト同ク旧く「ラカケテ。降ニヨセタルニ。サレバコノ歌ハ

キレ処ニタトコロト意得ベシ。男女ノカタラヒノ「ラ世ふちるま

トツ、キテ、ふと」トキレハセヌニシカニルモヨイフソレヲ云ル哥トミレハをよめる

ロレカメレド、テイル如クニニンモアシカラシ

る 連射

○^{後科雜} みる。みは涙の中よこめれもやあくるの梅よりあやまららん

るれ 已然

○^古 たのめろ。その際今ハ返してんまらる。バねらるる

りよ 希求

○^{貫之集} 天さうしんふゆりそふもいん雷もまけそりよとぞそ

コ、ニ亦又ツイテニイハン。下りよトよラ添テカク希求トセ

ル詞ハ羅行中二段ノ活キ故。枕冊子 ^{春曙}ニハ車とくぞ

る。人又 ^テねらる。これ送らんナドモ三エテ。カウ活ニ

ハたれトハ用ラカ又定リ。舊許ラふれ。由きトハタコト云

ハ又ニテモ明ナルモノラ。カノをねるハくりぞ女席をラ下れ

ト云フニ説ルハカヘス。モ甚 ^{イニシ}キヒガ「ナルヅカシ

△第卅四

・和行

此行リニハ中二段活語ハ元来ツモナキカト思ハルニヨリテ畧因トシテアルニカノ率ハモヤハリ一段ノ活キナラン歎ナドイヘル義山口栞ナル論ニテ考ベシ崇神紀ノ菟岐于ヨリニ考ヘテハちま_下ニ入ル_上ト活ク詞アリトセルゾノモトハ古事記傳廿_四ヨリ出タルナメレド傳ト同作ノ活用抄ニハ率ヲモひき_レハトレテむき_レハト活ケトハサタメタラス

○廿四

●一段活

△第卅五

・加行

〔さ〕 將然

○さくさきにころもハ海く條でまん花のちりちんのちれかこころ

〔さ〕 連用

○須广のらまの壇やまぐぬの夜衣まき_レ布_レはれ_レい_レま_レむ_レ割_レぎ

〔さる〕 截断

○さり衣さる_レと_レ後_レう_レく_レま_レは_レい_レつ_レれ_レの_レ人_レの_レあ_レと_レう_レく_レけん

〔さる〕 連射

○さるのさる_レの_レころも_レめ_レを_レさ_レる_レ山_レ風_レに_レそ_レこ_レる_レべ_レら_レれ

〔さる〕 已然

○麻衣_{さる}。れ_レバ_レな_レろ_レし_レさ_レの_レみ_レの_レい_レも_レせ_レの_レや_レま_レう_レ麻_まけ_こる_こ吉_妹

〔さよ〕 希求

○_{百十五}お妹_{さよ}子_{さよ}う_{さよ}ま_{さよ}こ_{さよ}こ_{さよ}き_{さよ}よ_{さよ}。た_{さよ}く_{さよ}う_{さよ}た_{さよ}る_{さよ}お_{さよ}の_{さよ}ひ_{さよ}も_{さよ}を_{さよ}ら_{さよ}れ_{さよ}と_{さよ}め_{さよ}や_{さよ}

△第卅六

・奈行

〔に〕 將然

※

ひれ

已然

百六

〇あぢひれ。バ。筆。辺。よ。さ。わ。く。ら。の。ま。あ。呼。了。ま。も。と。ぐ。ろ。り

塩千者

白鷗

ひよ

希求

△第卅八

・麻行

み

將然

〇

〇し。日。こ。む。バ。り。ま。ハ。雷。こ。ぞ。降。ま。し。消。ぎ。ハ。あ。り。も。む。と。み。ま。う。や

み

連用

〇

〇え。て。の。う。や。人。よ。か。ら。ん。さ。く。も。む。も。こ。と。の。れ。え。あ。つ。と。よ。き。ん

みる

截断

〇

〇く。ろ。ろ。ほ。み。く。ほ。ら。ん。さ。く。む。ち。る。ま。だ。よ。も。み。る。べ。き。の。り

二み

連舞

〇

〇こ。ろ。人。も。あ。ら。し。ま。め。さ。く。花。の。ち。り。る。人。の。そ。ま。ま。い

みれ

已然

〇

〇花。さ。は。ば。こ。ろ。さ。へ。よ。き。う。つ。り。け。る。さ。う。え。む。ど。ひ。も。こ。そ。い

みよ

希求

〇

〇く。だ。の。あ。む。よ。ぬ。ん。と。ど。れ。バ。れ。ぬ。よ。う。ん。人。を。枝。ち。う。み。ト

万葉一ニよき人よくみトアルラバ。みトノミイヒテモ。みよノ意ナレルナリトイヘル説ハトラズ。コノコ今書ノ終ノ処ニ云趣アリ。ソコニ至テ曉了セヨ。

み

連用

貫之集 〇山風ヨウをるるやうめれをきこふへるほとたふふ。そめらへ

み

截断

〇左日キくそへはたつみれハ又みる吹風と浪とけおひあこちをるらん

み

連射

〇古梅ヶえき来みるうごひまききけをけともいままきえきりへ

み

已然

〇くそへはたつみれハまたみる吹風と云

み

希求

〇後於君きめハ濁れる沈もなかりり汀のくもあき海へそ若よ

右ゴノきる。る。ひる。る。いる。ある。ハ。畧。示。ノ。ス。エ。因。又。略。示

ノ。処。ニ。今。ツ。界。ヒ。テ。

三キイ井ヒ

三キイ井ヒ

三キイ井ヒ

る

れ

トヤウニ曉サルベキガモレタル也。故ニ此方クニ予ノガ所聞ヲ

示セントス。コ、ニハ且クツノ本ヲ張りオク。ナホ今書ノ終

リニツノ。示。ラツバラニシツノ説ラクハレクスルヲ見テ知ベシ。

● 四段活

コハ例ヲ挙ルテテモナク。童蒙モ自ラシリヌベキ証。モイトノ、多。カルヲ尚ツツハ出シオクベシ。余リニシレタルコヲアナクダシレヤト云。人モアラメド。

△ 第四十一

● 加行

か

將然

〇克まこくれいなむの山の雲よけるまきりさうむ。今うらうら

△第四十二 佐行

将然

○^古うぐひ支の茎よぬみて小橋のむねてぐいん^老おいくるやと

連用

○^古かういんたぬあうり。どぶ屋のうきさへいぬる秋の長の月

截断

○^万去日世の影ある雲のあつこころんハ悪まん。月二日二けふ

連射

○^古ぬれておまぶちのまのまのまにいつちとせ紙紙ハ紙とらん

已然

○^古アウウ^古せを柳さくくをこきまうせて都ぞんるの沙なりある

希求

○^古ちりねとも香をぶんのこせ。梅のむね一さ時のかりひてよせん

此類アグルニタヘズ多シ文ニモ^古天の河系いづるいひむを

よらてさうづきハさせといひれむ」ナト夥シサレバ例ノ挙ル

テモナケレド俗言ニハ・のこせよ・させよトヤウニ多ク云故^重

蒙ノ為ニ其ワキラ示ントテカクテ云へよモジ漆レハ△才

二ト・佐行下サキニ示セル詞ノ活キニ混フ^後

△第四十三 多行

将然

○^古た

〇まぐるなく秋の葉系鈴くちて猿ゆく人をいつくまさん

ち 連用

〇とちぬむぬきぬき一人もなき物をあふんねの布きんらん

つ 截断

〇琴とればちげさきぶら。くくくくくくの下ひよまやこもれ

つ 連射

〇まろ人よらぬおろ初居のけさきくまのめくくくきくか

て 已然

〇まきくくくくむも白まぬんぶくくくくくくくくくくくくくく

て 希求

〇まてといふちらぐくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

コノてヨリらりるれト活ラケルハ下ツる。モジソヒテ者九ノ連

躰言トナレルハ。

〇くくくくくくををやつくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ノ類スベテ少カラス推テシルベシ。外満てらんまてり。まてりナド、
カ九ノ形状言トナル例思ウテ知シ。

△第四十四 波行

え 將然

〇幸の内よまきまきんりりくくくくくくくくくくくくくくくく

ひ 連用

〇るひいづるとささくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ふ 截断

〇あぐりくくあう後くまにそよ。あまうさうとやしもハミゆらん

ふ 連射

〇ことよりまきあうそむる極むちるといふ。あまうさうハミゆらん

へ 已然

〇もろまぬく人いへども。学よのまうぬきりともゆらどとぞら

へ 希求

〇今又よこふへき人もわえのハミゆらうて。いさなりてへ。

坎へニうりるまノ文字ノ添ル中ニ才十ノ已然言トナル多シ其

〇ぬくまぬ者下そ自へれ。秋の地よとらぬまかたり。あぢとくまそよ

△第四十五 ●麻行

ま 将然

〇もろさめのあうハ後うさうく花ちをばしまぬくしきさ

み 連射

〇あくひよ紅髪ふもかなくあうのまうさう。さそそ秋たくれ

む 截断

〇いありねかきまきまの田長ハ後うのむ。こが位さうのまう。後むさ

む 連射

〇まうあるしうぞなくある女まむおのうまむ。母の夜とあう。あや

め 已然

ノ類イトハ多シサテ又此希求言テレノハよモシ添タルモアリ仲
文集卅七入れよト三エタルナド。坎上ヲ上オ早ニ云ル趣キヲモ考フベシ。

△第四十七 將

人 連用

〇古君やさんそれやさん古のいざよひは格のいざよひもさうぞねはらり

コレハ用ノ詰ヲ受タルノト詞の玉の緒ニアレド本ハ用ナルヲ躰ニイヒナセ
ル上ナラテハのト受ルフハ都テナキコニサレハ此哥ニテモ人ヲコハ躰ニヤ
ルニテカノ「かきのみましく」ぢのまかひナド、全ラ同例ト云ベシ。レカハアレド
其躰ニイヒナサル、詞ハモト連躰言ナドナラズ百二十九テデモ連用言ナル格リニ
サレバカク躰ニレテのト受タルハ是即チ人ハ連用言ヲカヌルガ故ト知ベキニ
君やさんそれやさん古ハレハル処ナドニテハテレ連用ト云フ明ニ

人 截断

〇古淺やまいさまよりててやさん古さへぬる方をやゝぬるく

人 連躰

コノ人ハ万葉ナドニ將ノ字一タハ欲ノ字一アテタリ。唐詩ニモ花
欲然ナドハゆえんトコソヨムベキニゆえんトハつてトヨ
ミ来レルハヨク思ヘバカナハ又フニサテソノ欲アルヒハ將ニア
タルフ自下ノハオ人モノミニ同シサルコトロセルルナレ
ノ意ラツケテ三ヨ。

〇古よやうみそゆらん人古よあのもるハひすらん古枝もなるくハ

め 已然

〇古まことのむのさうりもありなめどあひいん古ことハ命なりやハ

サテコノ人古ツギノオ人古ハ希求言トナルフナレ故ニ希求
言ト書シテ横ニトホレル〇トアラハレテ
アルニカヤウノフスベテ聊ノフモワケノアル畧〇ゾ古凡ソニノ
三看過スフ勿レ。

△第四十八 ●ま

く 連用

のト受ルハ躰言故ニツノ躰言マ。ナルハモト連用故ナレバ
コソ躰ニ云ヒナサレテのノテニラハニウケラレシ。

〇和田の系よせくる浪のあむくもえまうのちきむへは

まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは
まうのちきむへは

〇あふちまふあせる夜さうはつてまうのちきむへは

く 截断

〇まの中へ終てさうのちきむへは

く 連絡

〇蛙さくあぐのふみさちうけりむのさうりは

カク物ト云躰ニツバケリまうをト歎ノ語ニツ子ニ云ルラモ思

べレ歎ノニテ恒ノニテ都テをハ連躰言ヲ受ル定例ニ

〇リオンまあはあハ零とをほうまじ

上ルハモト連躰言ナレドぞトカリテ截断セル例ニ下ナル

ハ截断固ヨリニテソヤヤトウケタリ

アラハセルヤニテ諸活用言ノ截断言ヲ受ルニ凡ソヤハスヘテ連用截断連躰
三ハサラニナリニハ已然言ヲ受ルトモアリテ其意オノク別ニ詞ノ上ニタツカ
ノゾのヤ何ノヤハ連用ヲ受ルト連躰ヲ受ルトモニ通ズルラ。ハ截断言ヲ受ル
ヤハサルカ、リノヤトナルヲナレ。コノ意ヲエテ見ベシ。

まう 已然

〇人まねむたえまうのちきむへは

ままうかむト云語出レバ其末ヲ必又まう。ハズ大方ノ例ナル

〇はまうのちきむへは

又ナホ将然ハハ已然ハ
此冊九ノ造語ハ哥ニハナレ。但シ是モ元來ハ

以語ノ全躰ガ将然ナルヲ。其中テ分ル、将然連用ハ闕テ。唯

サ截断ずる連躰ザレ已然ノ三用キヲ爲スニ。何んずらんハ何んずらんハ
誤リ見テ啓ニ討ルナカレ

○サテ因又略示トアルヲモ二其例ヲ云ニ。日本紀十四、あくさし

きわちのさらみ云旨我ナ那ケ稽バ摩バたれウかけんトあさり墨

繩旨我ナ那ケ稽バ摩バハ汝ガ無ケバニテ己ニ也
ト将然言ウケル辞ニテ無キヲウケルニ。万十春日の云ニ。宇都之家米也母。

万兼コハオ三けノ下ニ類例ニステニコヒ一けをくこいせん。各篇。古今

出セリコニハサレク的例引。こひ一けをくこいせん。各篇。古今

四マカらふ人ノこのあらんサテトヨ。又万一をくこいせん。各篇。古今

の酢四くれどねのうつまこそこめつらあき日本紀仁德卷ニころも

こそ二重もよき万十二。むろろまさぬる妹もあらば了そ夜の長きも

うれしうるべき。サテ又古今序。古今序をうめきて今をこひさらめ

ウもトイへル如キ。万兼ナドニ多シ。抑ウもほてコをハ。因ノ如ク連

躰言ヲ受テ。已然言ヲ受ル例ハナキ。然ルニ人ハ連躰截断ノニ

ノ活キニテソレヲ已然トスルトキハ薄シテめトナルヲ。其めニシモウも

ト受ルハイカニハニ。コハ返々モ已然言ヲウもト受ルニハ非ス。ウもハ

決メテ連躰言ヲウク。サルカラニめウもほへルハめヲむト同シサ。ニ

連躰言トセルモノノトゾ知ラル。ヨクノ考フベシ。サテ有リノリ連

躰言トテモカヌル言トシ。アルヒハ其活キれヲ已然ニ限ラズシテ截

断言トテモカヌル言トスル。是亦古キトコロニハコレカレトアリ。サ

ルニヨリ畧示セル因ナルズカシ。百六の大女人ハいとまうれやほへ

ルナトハ。れヲ截断言トセルニサテ又いざりせり。こや万つまたり。こや
コレモナドハ。マヲ連射トセルニヤト思ハレ。これや。何なりト様ニ云ルモ
又万サヤウ欵氏思ハル、カタヨリ四シテ。リヲハ連用截断連射ノ三ッ
ヲカヌルサテニテツ。トワクリ示レハ置レタルニサレドコハイツレモ
必ズト決メテニハアラス。タゞ後学ノ精研ヲテツノミノワザゾ
トノ口説モアリキ。カ、ルタグヒ又ハジメニイヘル一隅ヲアゲテ
三隅ヲ示ス。トビナド。オノノ、其意ヲ逆さかヘツ、ヤウノ、オヒツ
ギ定考シテヨトコ、ニモイヒサレオクニナン。

○サテトヨ△オ四十あよノ花ニ聊本ヲ張リ云置シテ。今コ、ニ
クハシクイハントス。テツ左ノ四ヲ三ベシ。

		一 段 ノ 活 キ								
		著	似	煮	干	噴	見	射	鑄	居
將然	キ	ニ	ニ	ニ	ヒ	三	イ	井	井	井
連用	キ	ニ	ニ	ニ	ヒ	三	イ	井	井	井
截断	キ	ニ	ニ	ニ	ヒ	三	イ	井	井	井
連射	キル	ニル	ニル	ニル	ヒル	三ル	イル	井ル	井ル	井ル
已然	キレ	ニレ	ニレ	ニレ	ヒレ	三レ	イレ	井レ	井レ	井レ

八衢上卷六る。イダをそへてさる。初と終く初とを、終とを、
ハ後の定りにてふろくハ万十春障のうはさつて煮良思
又古今集十花とやえら六帖六十松がえのまきさう十似へ十
後撰集十来てえへ十人もあしを土佐日記十似へ十る十オ

二音いさひみみ。よりある詞をうらめてをえを用ひし
 ありトアリゲニシカルトニサレドる。いをそへて云い後の定りト
 イヒ用ひよりトイヒステタルハアカ又云ヒガテコハるめをそ
 へてきつる詞をつく詞をひひするハまづ大くの定りなれど
 古くより後くまで万葉集のうもきつとて兼良思も
 二音オ二音をばべきらしらん。受も又少うらト様
 一云タラシゴヨカルベキ。うつち若原君卷ニきのハスらし枕冊子ニ大々人
 も物くもさきかよおきからんあやしくてトアル
ナレ古キ処所云ガタクシカノミナ
 ラズムゲノ近キ物ニモ猶アル例ニナテコレヲハらしらんへきノ助辞ヲハ
 スベテハキル言受ルナレド右ノヤウニニエタルハ以助辞連用言ヲ
 受ルモアルトイフベキニヤトモ思フ人アラシクソハワロシコレ

ハらんらしへきハ普通ノ例ノトニキル言ヲ受ル定リトシテオキ
 テ其らんべきらしシテ受ルハ是レ即チ居見ナドノるりテ
 ツヘヌニテ截
 断言氏云ベキ例ゾ云ベシサルニヨリテ上ノ件ノ如クニハ凶示シタ
 リシニ猶又コレヲタシカニセハ万葉六よろづよ見友あめや
 同十美代よぶさもりみてあひ見鞆コレヲモ同十八ナル美等母
 あくべき浦あうなくに又二十つらく美等母あめや又あバ
 ちバ美等母あうん君うもナドカケルニ合セテ何レモ見ラトトウ
 ケタルハミハコレ截断言ノ証ト云ベシ抑てをえドモノアルガ中ニ
 とととノニト歎息ノちト問カケノヤトナドハ諸活用言へ
 オシワタリ一貫シテ決定イハユル截断言ヲ受ル格ナルヲ略図ノ

〇ヨリトテカケテニハオノツカラ明ナルベシナホ云ハ万葉丸
ニ〇〇のえの浦崎の子之家地見トアルハいへところをミトヨミ
 一卷ニよき人のいよき人四来三トアルハよき人よき人トヨミテ
 ミ。テサシク截断言ニセルモノト云ベシ。
玉の小琴ニよくみハみよハ
ニトケレド二段ノ活言ヲ其下、
ニテ希求言トスル例ハナキコトヨク考フヘシ右ノ二音トモ其全射ノオモキモ
ミハ大カタハモジノソハリテ見ルト云ヒスル意トニテカナハザルニアラズ考ヘシ
 サテ又万十卷ニ玉さるるのへまらるるニ雖立雖居君かま
 にまらト三エタル雖立雖居ヲもらるるもらるるト訓ミテハハツ子
 ニハあるト云ルニ同シ雖見ヲ見ともほへルガツ子ハみるともほへルニ
 同シキラモテ例知スベシト云テヨケン。
雖立雖居ハ仙覺本ニハタチテモ
トヨメルヲ鈴屋ハレヲハ古訓の如
くたちてもかてもよみてハ哥のまらるるハもたつともらるるハもほへしはハツ
テ又百首異見ニハたちともらるるトヨメドたちともらるるト多行四段ノ活言ノオニ音

ラともト受ルト云フハカツテ例ナキコトシカレドモ次ナル雖居ラ。みともハ暗ニ叶ヘルヨ
 三サテハコラうともト訓ムベシトノ説ハ崇神紀ノ急居ヲつみまらアル訓註ヨリ考ヘ
 テノコナメレドカノ雖見ヲむともトハヨムテジク必みともトヨムヘキ。イハユル義等母
 ニテ明ナルニ例准スルニコレ必不可。らともらるともトヨムベキコト上ニ云ル如ク思フヘシ。
 或人問ヘラク。作用ノ語ニキル。処ハ大方皆五十音ノオ三ニア
 リテ。韻ノ音ニオニ。韻ノ音ヲ截断言トスルハ形状言ニ限
 ルニアラスヤ。答。以問ハゲニ謂レタレド。形状言中ニモ不ハ。韻ニ
 テ截レ。作用言中ニモ將ハ。韻ニテ断レ居レリ。一段活ノ。キ。三。ナ
 ドノ。韻ニテ居ラン。アル。ジキニモ非ルニ。
但シザハ万葉ナドニ。ハ三ニユ
ナラズ。ナドイヘリト
云ヒ。サテハ形状言ハ。ニテ三ナ截ル。例ゾト。義シカノ將字ニアタルランキ。ハ正シキ作
用。イヒガタキコ。ナシ。不ハ又形状トノ三モオモハレズ。ナド論ジテカニカクニ作用言ノ。イ
韻ニテ居ランハイカ。カ。ス。カ。テ。此。一。段。ノ。活。キ。ノ。き。こ。ひ。み。い。み。ハ。上。ニ。ア。ラ。ハ。セ。
トイフ人モアラメド。亦ハコレヲバ截断言ヲモカヌルニ。ル。如ク。心得。ザレハ。

花と名えん引れり似へきハつて者。ナト云ル詞用ヒヨク
 腹ニ味ハレズ。足ともあつめやほへルハテテ解セザルヘシコレ然ル
 ラ何トナク自ラニ解セテアル様ニ思ハヨク正セバワレ乍ラアヤシ
 キトトゾ誰モ思ベキサテコニ聊云置ベシくらげを炙冬木
 の皮ナドノのきあるハコノ畧図カノ友かみナル図比ノ中
 へハ入りガタキヤウニ思ハル此「活語雑話」二編六丁ニテ曉メテヨ
 小子。

今も昔もやせなありぬ物ありく山とまみりたり
 大和乃國の物一つ一ついはれ都まきうてつむひ
 あつるまきいらはけりけりけりけりけりけりけりけり
 阿き人乃九如堂よりくわうまうさく一山の夜いそれ
 吾儕といひ書をえつゆくまは論いともやうくまは
 人乃吾愛うまてはとやうのあふれ必少漏れれれ亦里
 まうそれも廿十丁つりつり指をねる旅一阿れは
 小つらむいしむきくまはまきくまはまきくまはまきくまは
 訪つとくやまあつるまきくまはまきくまはまきくまは
 大徳あり

新編の字もなるに似せざるも其の意は深しむるに似せざる。一
しづのこ流ひけるをば、免るて今ハ師といひておむ
き、道こそ遠けれ、唐の如きは、あふをさる
使ふも、和信、後略図といふ一ひら、題名を誤りしや
あり、あふをさる、其のこ、中ひ万ありせ、あふをさる
乃、あふをさる、河や、あふをさる、いふ、あふをさる、あふをさる
畧全圖と題つけ、あふをさる、いふ、あふをさる
河、あふをさる、り、あふをさる、あふをさる、あふをさる
うき、あふをさる、あふをさる、あふをさる、あふをさる

考、あふをさる、あふをさる、あふをさる、あふをさる
乃一ひら、あふをさる、あふをさる、あふをさる
あれ、あふをさる、あふをさる、あふをさる
改め、あふをさる、あふをさる、あふをさる
ひ、あふをさる、あふをさる、あふをさる
い、あふをさる、あふをさる、あふをさる
あ、あふをさる、あふをさる、あふをさる
書、あふをさる、あふをさる、あふをさる
や、あふをさる、あふをさる、あふをさる

理よりなるをわれ乃長年を此と一又さらさらして
 ちむ押ひし一宵此詞乃林乃あまやうある也二也
 貴もさる人ハウちるも更之れ此乃ウらある格ウ此語
 校ありきをくくえふ一さふの廣とも長ともを
 志うわくけ板ハおの文とあり千歳も自乃極未
 抑ふ本とある書ハ諸人乃腹ヲ懸くわれ此花乃真
 とらちたわふまに獨りこちをさくくあつて
 けう一ぬるは天保十二年三月廿七日

上毛郡國其某別言漱雪人 新井守村

若狭妙玄寺義門大徳著述目録

山口栞	三冊	せいの像	合卷一冊
活語指南	二冊	彈乃とせ	一折
活語雜話初篇	一冊	友鏡	一冊
同二編	一冊	同底面影	一冊
同三編	一冊	活語餘論	一冊
奈末之奈全書	三冊	玉緒緒くうり	三冊
類聚雅俗言		於乎輕重義	一冊
和語説略圖	一折	月草	卷數未定
以上			

天保十五甲辰年孟春

發行

書肆

京都

大坂

江戸

勝村治右衛門

蛭子屋市右衛門

河内屋儀助

英屋大助

岡田屋嘉七

